

異文化理解から多文化共生へ～共に生きる社会をめざして

学校所在府県：京都府

学校名：宇治市立西小倉中学校

名前：藤原なつみ（英語）

実践教科：総合的な学習の時間

指導時数：5 時間

対象学年：中学校 2 年生 (3 クラス)

対象人数：99 人

1. 教師海外研修を通して感じたこと

異文化に触れることが以前から好きだった私は、尊敬している上司にこの研修を勧められ、「自分の五感でたくさんのごことを吸収したい、そしてそれを子どもたちに伝えたい」、初めはそんな単純な気持ちであった。開発教育に興味を持ち始めワークショップなどで学び出してまだ日も浅く、この研修に参加するまでブラジルという国について、そして移民政策についてもほとんど何も知らなかった。

そんな私が、初めて行く地球の裏側で一番驚いたのは、そこにたくさんの「日本」があったことだ。そしてその異国で出会う日本文化に全く違和感がなかったことにまず衝撃を受けた。同時に、とても嬉しかった。どこか懐かしさを感じる、異国なのに故郷に帰ったような、そんな気持ちになった。それはまさしく日本文化が浸透していただだけではなく、移民した日本人から子孫である日系ブラジル人へと代々受け継がれる中で、ブラジル文化と融合しながら発展しているからこそだと思った。その融合には無理がないのだ。サントスに降り立った先人達を始めとしこれまで日系ブラジル人が苦勞して築き上げたものは、ブラジル人だけではなく様々なルーツをもつ人達とお互いに認め合いながら、共生してきたのである。

本や映像で読んだり見たりして知り得たブラジルとは異なる、五感で知り得たブラジルが、今まで分かったような気であった私の中での「多文化共生」のイメージを大きく変えてくれた。その感動は素直に子どもたちと一緒に考えたい、実践したいと思った。「自分自身が変容した経験を持った教師でないと子どもの変容に気づけない」、事前研修で教わったこの言葉の意味がよく分かる教師海外研修となった。

2. カリキュラム

(1) 実践の目的・背景

本校はウトロ地区（在日韓国・朝鮮人の集住地域）に隣接しており、韓国・朝鮮をはじめ中国・フィリピンなどの外国にルーツを持った生徒が数人在籍している。また、この地域に以前在特会（在日特権を許さない市民の会）によるヘイトスピーチが行われたこともあった。その様子を目の当たりにし、スピーチを耳にした生徒は少なくない。そういった状況の中、昨年の春私が担当している今年中学2年生の学年の子たちが入学してきた。そこで、真新しいシューズ入れを配付されたとき、「made in China」のタグを気持ち悪いからとはさみで切っていた生徒、「ウトロは怖いから近づいたらあかん」と差別に何の疑問も抱いていない生徒、大半の人と違っていたり自分がおかしいと感じたりするとすぐに「がいじ（障害児を意味する言葉）」と馬鹿にする生徒と出会った。

そんな学年の生徒の状況を踏まえ、前述した上司がコーディネートしてくださった国際理解教育に昨年度私も一担任として取り組んだ。6月の体験学習で大阪鶴橋のコリアタウンを訪れ、コリアNGOセンターの講師による「異文化体験（キムチ作り、伝統遊び、チャンゴ体験）」、「コリアタウン（御幸森商店街の周辺）のフィールドスタディ」、「御幸森商店街での班別自由行動（トポギなどの食べ歩き）」を行った。10月の体験学習では神戸を訪れ、午前中は学年で「人と防災未来センター」を見学し、午後からは海外移住と文化の交流センターや神戸ムスリムモスクなどの8ヶ所の施設を班別で見学し、南京町で食べ歩きを行った。どちらとも事前・事後学習では班ごとに与えられたテーマについての調べ学習や、体験した内容を新聞や紙芝居にまとめ発表会を行った。この学習を通して生徒は少しずつ異文化を理解し、考え方にも変化が見られた。

そこで昨年度の取り組みを生かし、この研修で学んだ私が異文化理解から多文化共の学習へと駒を進めていく必要があると考えた。そして、これから先の人生でもしかしたら国際理解教育を受ける機会がないかもしれない生徒にとって、私の研修・実践が世界に目を向けるきっかけになってほしいと考えた。さらに差別に何の疑問も抱いていない生徒たちの「異なる他者を認める」力がついていき、正しい人権感覚が身につくよう、取り組みを進めていきたい。

(2) 授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1 時限目 ブラジルの文化 ～地球の裏側はちがう？おなじ？ ＊ブラジルの文化・ブラジル人の生活について知る。	<ul style="list-style-type: none"> ●ブラジルの位置を地球儀・世界地図で確認する。 ●ブラジルと聞いてイメージするものを発表する。 ●パワーポイントで日本との距離・フライト時間、ブラジルの首都などを知る。 ●班でブラジルカルタを行う。 ●振り返り用紙に本時の感想を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ●世界地図 ●地球儀 ●パワーポイント ●ブラジル地図 ●ブラジルカルタ（自作） ●振り返り用紙
2 時限目 ブラジル移住 ～日本とブラジルのつながり～ ＊移民政策、移民が築いた日系社会について学ぶ。	<ul style="list-style-type: none"> ●フォトランゲージ：班ごとにホワイトボードに意見をまとめる。 ●班の代表が発表する。 ●パワーポイントで、移住の流れや笠戸丸での生活などについて知る。 ●モノランゲージ：班ごとに4種類の実を嗅いだり、触ったりする。 ●パワーポイントで、移民した日本人がブラジルでも日本文化を大切にしていることを知る。 ●振り返り用紙に本時の感想を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ●写真8枚 ●ホワイトボード ●パワーポイント ●ブラジル地図 ●カカオ、コンショウ、アサイー、コーヒーの生豆、棉花、麻袋 ●振り返り用紙
3 時限目 多みんぞくニホン ～在日ブラジル人とは～ ＊在日ブラジル人の存在、文化の違いから生じる問題について考える	<ul style="list-style-type: none"> ●DVD①「100年前のブラジルへタイムスリップ」を視聴する。 ●日系ブラジル人の家族写真を見て、日系ブラジル人2～4世の存在、日本のブラジル人集住地域を知る。 ●DVD②テレビ番組「バクモン探検隊 ブラジル街群馬県大泉町」を視聴する。 ●漫画「クラスメイトは外国人」の話を3つ読む。 ●振り返り用紙に本時の感想を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ●DVD① ●パワーポイント（写真） ●DVD② ●マンガ「クラスメイトは外国人」 ●振り返り用紙
4 時限目 共に生きる社会をつくるためには ＊在日ブラジル人のおかれている状況を理解し、共に生きる社会を作るために必要なことを考える。	<ul style="list-style-type: none"> ●前時の感想の交流を行う。 ●ロールプレイングを行い、感じたことをワークシートに書く。 ●民博の展示の写真を見て、「多みんぞくニホン」を知る。 ●ダイヤモンドランキング「『共に生きる（多文化共生）社会』をつくるために」を作成する。 ●班の代表が発表する。 ●振り返り用紙に本時の感想を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ●役割カード^[資料1] ●ワークシート ●写真（国立民族学博物館の展示） ●ダイヤモンドランキング^[資料2] ●振り返り用紙
4 時限目 在日ブラジル人の実際 ～言葉が通じないって？～ ＊実際に在日ブラジル人の方と出会い、経験談を聞き、文字を読めない体験をすることによってこれまでの学びをより深める。	<ul style="list-style-type: none"> ●奥村ルシアさんの紹介を聞く。 ●パワーポイントを使ったクイズに答える。 ●ルシアさんの経験談を聞き、外国で暮らすこと、言葉が分からない困難について考える。 ●文字を読めないことの疑似体験をする。 ●ブラジルの子どもが参加する日本語教室を知る。 ●ルシアさんのメッセージを聞き、多文化共生社会について考える。 ●振り返り用紙に本時の感想を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ●ゲストティーチャー（彦根市役所 人権政通訳・相談員 奥村ルシアさん 日系ブラジル人2世） ●パワーポイント ●ペットボトル（水と塩水1本ずつ）と紙コップ ●振り返り用紙

3. 授業の詳細

1 時限目：ブラジルの文化～地球の裏側はちがう？おなじ？

ねらい…ブラジルの文化・ブラジル人の生活について知る。

◆内容◆

- ① ブラジルの位置を地球儀・世界地図で確認する。
- ② ブラジルと聞いてイメージするものを発表する。
- ③ パワーポイントで日本との距離・フライト時間、ブラジルの首都などを知る。



ブラジルカルタ

- ④班でブラジルカルタ（実際にブラジルで撮影した町中の様子、食べ物、建物、落書き、人などの写真をカルタのサイズにしたもの）を行う。1枚取るごとにパワーポイントで、その写真に写っているものを補足の写真とともに理解する。
- ⑤振り返り用紙に本時の感想を書く。

！ココがポイント

カルタのカードは実際のブラジルを体験できるように、撮ってきた写真を使い、文字は付けなかった。読み札も写真をよく見て他の生徒と話合えるような内容にしたので、その後の説明も興味を持って聞いていた。

生徒の感想

- ▶ブラジルは日本からとても遠い国なので、サッカーとかカーニバルしか知らなかったのですが、楽しみながら色々な文化を知れて良かったです。公園でココナッツが売っていたり、おじいさんが筋トレをしていたり、日本では見られないような植物があって面白かったです。あと食べ物も全部おいしそうで食べてみたいです。

◆所感◆ カルタを通して、私が五感で吸収したブラジルを生徒にも体験してもらえたように思う。特にブラジル文化に興味を持っただけでなく、何人かの生徒は「何で公園に日本館があるの？」という、次の授業のつなぎとして入れていた要素もつかんでくれていて導入としてはとても良い形になった。

2 時限目：ブラジル移住～日本とブラジルのつながり～

ねらい…移民政策、移民が築いた日系社会について学ぶ。

◆内容◆

- ① フォトランゲージ：班ごとに違う写真を見て、気づいたことや疑問に思ったことなどを話し合いホワイトボードに書き出す。
- ② 班の代表が前に出て、ホワイトボードを使って発表する。
- ③ パワーポイントで、フォトランゲージ写真や補足の写真を見ながら、移住に至った当時の日本の状況、神戸で2週間滞在してから笠戸丸での約1ヶ月半の船上生活、原生林を切り拓き開墾したことなどを知る。
- ④ モノランゲージ「日本から移住した人たちは何を作ったのでしょうか？」：班ごとに4種類の実を嗅いだり、触ったりして移民が作った農作物を考える。
- ⑤ パワーポイントで南米本願寺やサントス厚生ホームで故郷を歌うご老人たち（日系ブラジル人）の写真などを見ながら、移民した日本人がブラジルでも日本文化を大切にしていることを知る。
- ⑥ 振り返り用紙に本時の感想を書く。



日本っばい？

！ココがポイント

フォトランゲージの写真を「移住奨励ポスター」から、「サントス厚生ホームで故郷を歌う日系ブラジル人」という時代の流れがわかる8枚にしたことで、話し合い・発表後の解説もスムーズであった。

生徒の感想

- ▶日本とブラジルのつながりについてよく分かりました。お互いに大事にしているところが素晴らしいと思います。私もポルトガル語は話せないけど、ブラジルに行ってみたくなりました。日本の文化がそのまま残っているわけではなく、ブラジルの文化も融合しているところもいいなと思いました。老人ホームにいた方々（日系の方）もとても楽しそうでした。全世界が日本とブラジルのように仲良くなれたらいいなと思いました。

◆所感◆ 初めてのフォトランゲージで、どこまで気づきが出てくるのが不安であったが、「これほんまに全部ブラジルの写真？」と疑問に思いながら、予想以上に班での交流を楽しんでいた。モノランゲージでは、興味津々で「これでほんまにチョコが作れるん？」と実を割ってみる生徒もいた。そして私を感じたようにブラジルに「日本」がたくさんあることに驚きと喜びの表情を見せていた。

3 時限目：多みんぞくニホン～在日ブラジル人とは～

ねらい… 在日ブラジル人の存在、文化の違いから生じる問題について考える。

◆内容◆

- ① DVD(1)「100年前のブラジルへタイムスリップ」を視聴し、移民の孫にあたる子どもたちが日本に来て暮らしていることを知る。
- ② パワーポイントで、ベレンに住んでいる日系ブラジル人の家族の写真を見て、日系ブラジル人2～4世の存在を知る。同時に日系ブラジル人が滋賀県や群馬県などの地域に多く暮らしていることを知る。
- ③ DVD(2) テレビ番組「バクモン探検隊 ブラジル街 群馬県大泉町」を視聴し、ブラジル人集住地域の様子と、ブラジル学校の子どもたちの状況を考える。
- ④ 漫画「クラスメイトは外国人」の話を3つ読み、文化や考え方の違いから生じる問題について考える。
- ⑤ 振り返り用紙に本時の感想を書く。



日系ブラジル人の
お宅に
ホームステイ

日系ブラジル人とは

！ココがポイント

DVDで大泉町のブラジル学校の様子を見てから、「クラスメイトは外国人」の漫画を読んだので、同じ在日ブラジル人でもブラジル学校に居る子と日本の学校にいる子の環境の違いを理解することができた。

生徒の感想

- ▶ 日系ブラジル人4世とかまだまだ知らないことだらけで、驚くことばかりでした。100年前は仕事を得るためにブラジルに行ったのに、今は逆に仕事が無くなって日本に帰ってきていて、100年も時間があると昔ととても変わるんだなと思いました。授業の最後に配られたマンガではとても大変な思いをしている人がいることが分かりました。
- ▶ 日系ブラジル人のことについてよく分かりました。私は外国人の血が入っているのは悪いことではないし、誇りに思っていて良いと思っています。ディエゴ君に起こったことは、文化の違いによって起こったことだと思います。そういうことがないよう、相手のことをしっかりと理解し、互いに助け合っていくことが大切だと思います。

◆所感◆ 1つ目のDVDが移民の孫にあたる子どもたちが日本に来て暮らしていることが分かるアニメだったので、前時の復習と本時の導入となった。ホームステイした家族の写真を家系図のようにして紹介したので生徒はとても食いつき、日系ブラジル人〇世の存在を理解しやすかったようだ。「クラスメイトは外国人」で「自分の学校にもし来たら」と現実味を持って考えられる生徒が出てきたのが収穫であった。

4 時限目：共に生きる社会をつくるためには

ねらい…在日ブラジル人のおかれている状況を理解し、共に生きる社会を作るために必要なことを考える。

◆内容◆

- ① 前時の感想をいくつか聞き、共有する。
- ② ロールプレイング：班隊形にし、役割カード（それぞれの年代が異なる5人の日系ブラジル人の思いが綴られた文章カード）をその人になりきって一人ずつ順番に読む。在日ブラジル人が日本での生活や学校・就職において困ることや制限されることについて理解する。
- ③ 民博の「多みんぞくニホン」展示の写真を見て、日本にはブラジルだけでなく、様々な国にルーツをもつ人たちがいることを知る。
- ④ ダイヤモンドランキング「『共に生きる（多文化共生）社会』をつくるために」を個人で行ってから、班で意見交換して、班のランキングを作る。
- ⑤ 班の代表が発表する。
- ⑥ 振り返り用紙に本時の感想を書く。



多みんぞくニホン

！ココがポイント

役割カードは滋賀県国際協会の方から教えていただいた実際の出来事などを基に作成したので、事実と近いものになっている。生徒にはその後のダイヤモンドランキングを考える上で、良い動機づけとなった。

生徒の感想

- ▶ 日本で暮らす外国人は、たくさん抱えている問題を抱えていることが分かりました。困っている外国人が少しでも住みやすく、生活しやすい社会ができたらいいなと思いました。参政権を持ってない外国人がいることは初めて知り、長く日本に住んでいるのであれば、日本のこれからの未来を考える権利を外国人も持つべきだと思います。
- ▶ 私は同じ日本人でも考え方や感じ方が違うのに、ましてや外国人の考え方や感じ方を無視して、自分の意見や立場を正当化する人の考え方が分かりません。そういう人は、もっと多文化について学び、もっと色々なことを知る必要があると思います。人はぶつかり合うことが多々あると思います。でも、自分の意見を言い、相手の意見を知り、感じる事が大切なんだと思いました。

◆所感◆ 外国人が日本で生活する上での困難を初めて認識する生徒が多く、特に就職やアルバイトでの制限、差別的な扱いにはショックを受けている様子であった。ダイヤモンドランキングのまとめを行う中で、「多共生社会をつくるために、まず一人一人が現状を知り考えること」が大切だという思いを共有できた。

5 時限目：在日ブラジル人の実際～言葉が通じないって？～

ねらい…実際に在日ブラジル人の方と出会い、経験談を聞き、文字を読めない体験をすることによってこれまでの学びをより深める。

◆内容◆

- ① 奥村ルシアさんの紹介を聞く。
- ② パワーポイントで、「日本にはどのくらい外国人がいるでしょう？」「京都にはどの国の人が多く住んでいるでしょう？」などのクイズに挙手で答えながら、京都に約5万人以上の外国人が住んでいることを知る。
- ③ ルシアさんのご両親のことや来日した経緯、苦労したことなどの経験談を聞き、外国で暮らすこと、言葉が分からない困難について考える。
- ④ 文字を読めないことの疑似体験：ロシア語で①飲料水②トイレの水と書いてあり、班の代表が前に出て選んだコップの方を飲む。(①は水、②は塩水)

- ⑤ ブラジルの子どもが参加する日本語教室の紹介。
- ⑥ 「考えや意見が違う人がいるのは当たり前こと、だからこそそれを尊重することが大切」という強いメッセージ。
- ⑦ 振り返り用紙に本時の感想を書く。

生徒の感想

- ▶ 実際に会っているいろんな話を聞いて、今までよりもっと大変さが分かった。①の水と②の水を飲むとき結構不安になった。言葉が通じない、読めない時の不安を知った。今まで体験したことのない不安だった。
- ▶ 在日の人の大変さや字が読めないことの怖さがよく分かった。日本に外国人の方が200万人も住んでいて、京都にも5万人以上の人がいるという事実にはとても驚いた。こんなにたくさん外国人がいるからこそ、その国それぞれの文化を知り、受け止める必要があるなあと考えた。自国民の事だけでなく、外国の人にも優しい国になれば良いと思う。

◆所感◆ ルシアさんに出会った生徒たちは「ブラジル人？日本人？」と初めは困惑気味であったが、彼女の話聞いていく中で、徐々に在日ブラジル人について理解していた。そしてこれまでの授業で学んでいた彼らのおかれる状況について、現実味をもって受け止めているようであった。文字が読めない体験では、外国で暮らすことの不安を身をもって感じていたようだ。彼女の前向きに挑戦する姿が、自分のアイデンティティを大切にする一人の在日ブラジル人として生徒たちの世界を広げてくれたように思う。

4. 成果

この実践を進めるにあたって、「貴重な経験を無駄にしたいくない」という思いから、どうしたら良い授業になるかという気持ちが先走り、これまでの経験不足から模索する日々が続いた。しかしそこでいろんな方々からヒントをもらい、私自身の「多文化共生社会をつくりたい！」という思いが原点にあって初めて教材が生まれ、その使い方が様々な手法であると気づいた。初歩的ではあるが、その気づきから自分で一から教材を作り、授業を構成できたことは、これから開発教育の実践を進めていく上で大きな成果となった。また、昨年度の取り組みの中で培った生徒たちの班活動のスキルも感じる事ができた。不安であったフォトラングージなどの取り組みも、彼らなりに一生懸命取り組んでいる様子や友だちの意見を聞いたりともに考えたりすることを楽しむ様子が見られ、これからも実践の中で活用していきたいと思う。

5. 課題

今回の実践では、1つの授業の中に大きなテーマを持ち、それが時代の流れの中で理解でき考えられるようにしたので、内容を盛り込みすぎたという反省があった。生徒が主体になれる2つ、3つの教材や手法でしっかりと時間をかけ学びを深められるような授業にしていくことも重要だと思った。そんな授業するにはまだ自分の知識と力量が足りないと実践を終えて改めて痛感している。

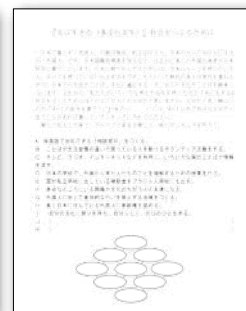
開発教育は、道徳教育や人権教育と同じで今日これを学んだから、明日それに見合った行動ができる、といったような即効性はない。だからこそこの実践に満足せず、生徒をじわじわと何度も刺激し続け、考える機会を与えて続けていかなければ、学びは実になっていかない。来年度は3年時に慣例となっている「地球のステージ」がある。世界の現状を上辺ですく取るのではなく、それを受け止め考えられる受け皿をそれまでに養う必要がある。生徒たちにとって私自身が「多文化共生社会を実現するために考え行動する」一モデルとなるよう、ここからが本当の実践のスタートだと思う。

参考資料・文献

- ・「日本からブラジルへ移住 100年の歩み」財団法人日伯協会
- ・「地球の歩き方 ブラジル・ベネズエラ」ダイヤモンド社
- ・「考えよう！ともに生きる浜松の未来」浜松国際交流協会
- ・「クラスメイトは外国人 多文化共生 20の物語」
- ・「クラスメイトは外国人 入門編」明石書店
- ・「身近なことから世界と私を考える授業Ⅱ」明石書店
- ・「移民を授業する」多文化社会米國理解教育研究会
- ・「多みんぞくニホン一在日外国人のくらしー」



資料1



資料2